

かえるの王さま

DER FROCHKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

むかしむかし、たれのどんなのぞみでも、おもうようになってきたときのことです。

あるところに、ひとりの王さまがありました。その王さまには、うつくしいおひめさまが、たくさんありました。そのなかでも、いちばん下のおひめさまは、それはそれはうつくしい方で、世の中のことば、なんでも、見て知っていらつしやるお日さまでさえ、まいにちてらしてみても、そのたんびにびっくりなさるほどでした。

さて、この王さまのお城のちかくに、こんもりふかくしげった森があつて、その森のなかに一本あるふるいぼだいじゆの木の下に、きれいな泉が、こんこんとふきだしてました。あつい夏の日ざかりに、おひめさまは、よくその森へ出かけて行って、泉のそばにこしをおろしてやすみました。そして、たいくつすると、金のまりを出して、それをたかくなげては、手でうけとったりして、それをなによりおもしろいあそびにしていました。

ある日、おひめさまは、この森にきて、いつものようにすきなまりなげをして、あそん

でいるうち、ついまりが手からそれておちて、泉のなかへころころ、ころげこんでしまいました。おひめさまはびっくりして、そのまりのゆくえをながめていましたが、まりは水のなかにしずんだまま、わからなくなってしまうました。泉はとてもふかくて、のぞいても、底はみえません。

おひめさまは、かなしくなつて泣きだしました。するうちに、だんだん大きな声になって、おんおん泣きつづけるうち、じぶんでじぶんをどうしていいか、わからなくなつてしまいました。

おひめさまが、そんなふうに泣きかなしんでいますと、どこからか、こうおひめさまによびかける声がありました。

「おひめさま。どうなすつたの、おひめさま。そんなに泣くと、石だつて、おかawaiiそうだと泣きますよ。」

おや、とおもつて、おひめさまは、声のするほうをみまわしました。そこに、一ぴきのかえるが、ぶよぶよふくれて、いやらしいあたまを水のなかからつきだして、こちらをみていました。

「ああ、水のなかのぬるぬるぴつちやりさん、おまえだったの、いま、なにかいったのは

。「と、おひめさまは、なみだをふきながらいいました。「あたしの泣いているのはね、金のまりを泉のなかにおとしてしまったからよ。」

「もう泣かないでいらつしやい。わたしがいいようにしてあげますからね。」

「じゃあ、まりをみつけてくれるっていうの。」

「ええ、みつけてあげましょう。でも、まりをみつけて来てあげたら、なにをおれいにくださいますか。」

「かわいいかえるさん。」と、おひめさまはいいました。「おまえのほしいものなら、なんでもあげてよ。あたしのきているきものでも、光るしんじゅでも、きれいな宝^{ほうせき}石でも、それから金のかんむりでも。」

「いいえ、わたしはそんなものがほしくはないのです。けれど、もしかあなたがわたしをかわいがってくださいって、わたしをいつもおともだちにして、あなたのテーブルのわきにすわらせてくださって、あなたの金のお皿から、なんでもたべて、あなたのちいさいおさかずきで、お酒をのましていただいて、よるになったら、あなたのかわいらしいお床^{とこ}のそばで、ねむってよいとおつしやるなら、わたしは水のなかから、金のまりをみつめてきてあげましょう。」と、かえるはいいました。

「ええ、いいわ、いいわ。金のまりをとってきてくれさえすれば、おまえのいうとおり、なんでもやくそくしてあげるわ。」とおひめさまはこたえました。そういうながら、心の中では、（かえるのくせに、にんげんのなかま入りしようなんて、ほんとうにずうずうしい、おばかさんだわ）と、おもっていました。

かえるは、でも、約束やくそくのとおり、水のなかにもぐって行きました。しばらくすると、ちゃんと金のまりを口にくわえて、ぴよこんとうかび上がってきました。そして、

「さあ、ひろってきましたよ。」

そういつて、草のなかにまりをおきました。ところが、おひめさまは、そのまりをつかむなり、ありがとうともいわず、とんでかえって行きました。

かえるは大声をあげて、

「まってください、まってください。」といいました。「わたしもいっしょにつれてつて。わたしはそんなにかけられない。」

けれど、かえるが、うしろでいくらぎやあ、ぎやあ、大きな声でわめいたって、なんのたしにもなりません。おひめさまは、てんでそんなものは耳にもはいらぬのか、とツとツうちのほうへかけだして行ってしまつて、かえるのことなんか、きれいにわすれてい

ました。

かえるは、しかたがないので、すぐすぐ、もとの泉のなかへもぐって行きました。

二

そのあくる日のことでした。

おひめさまが、王さまや、のこらずのごけらい衆しゅうといっしよに、食事のテーブルにむかって、金のお皿でごちそうをたべていますと、そとでたれかが、ぴっちり、ぴっちり、大理石のかいだんを上がつてくる音がしました。そして、上まで上がつてしまうと、戸をとんとたたいて、

「王さまのおひめさま、いちばん下のおむすめご、どうぞこの戸をあけてください。」という声がしました。

おひめさまは立ち上がって行つて、たれかしらみようとおもつて、戸をあけますと、そこに、きのうのかえるが、ぺっちりすわっていました。

おひめさまは、ぎよつとして、ばたんと戸をしめるなり、知らん顔で席にもどりました。

でも心配で心配でたまりません。おひめさまが胸をどきどきさせているのを、王さまはちゃんと見ておいでで、

「ひいさん、なにをびくびくしておいでだい。戸のそとに、おおにゆうどう大入道の鬼が来て、おまえをさらって行こうとでもしているのかい。」とたずねました。

「あら、ちがうの。」と、おひめさまはこたえました。「大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、きみのわるいかえるが来て。」

「そのかえるが、おまいにどうしようというのだね。」

「あの、おとうさま、それはこういうわけなのよ。あたし、きのう、いつもの森の泉のところであそんでいましたらね、金もまりが水のなかにころげおちました。それであたしが泣いていると、かえるが出てきて、まりをとってくれましたの。それから、かえるがしつこくたのむもんだから、じゃあお友だちにしてあげるって、あたしかえるに約束やくそくしてしまいました。まさか、かえるが水のなかから、のこのこやってこようとは、おもわなかったんですもの。それが、あのとおりやって来て、なかへ入れてくれっていうんですもの。」

そのとき、またろうかの戸をとんとたたたく音がしました。そうして、大きな声でよび

ました。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。

つめたい泉の わくそばで、

きのう やくそく したことを、

あなたは おぼえて いるでしょう。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。

すると王さまはいいました。

「それはおまえがいけないね。いちどやくそくしたことは、きつとそのとおりしなければなりません。さあ、はやく行って、あけておやり。」

おひめさまはしぶしぶ立って、戸をあけました。とたんに、かえるはびよこんとびこんで来て、それから、おひめさまのあとについて、ひよこひよこ、いすの所までやってき

ました。

かえるは、そこにしゃがみこんで、上をみながら、

「わたしも、そのいすに上げてください。」といいました。おひめさまがもじもじしていると、おとうさまがまた、かえるのいうとおりしておやりといいました。

おひめさまはしかたなく、かえるをいすにのせてやりました。
すとかえるがまたいいました。

「どうぞ、わたしを、テーブルの上にのせてください。」

おひめさまが、かえるをテーブルにのせてやると、こんどは、

「さあ、その金のお皿をずっとわたしのほうによせてください。そうするとふたりいっしょにたべられるから。」といいました。

おひめさまは、かえるのいうとおりしてやりました。ほんとに、かえるが、ぴちやぴちや、さもおいしそうに舌づつみうつてたべているそばで、おひめさまは、ひとくちひとくち、のどにつかえるようでした。

かえるはたべただけだと、おなかをまえへつきだして、

「ああ、おなかがはって、ねむくなつた。おひめさま、さあ、わたしをあなたのおへやに

つれて行ってください。かわいらしい、あなたのきぬのお床とこのなかで、わたしはゆっくりねむりたい。」

おひめさまは、もうがまんができなくなつて、しくしく泣きだしてしまいました。ほんとに、ぬるぬる、ぴちやぴちや、さわるのもきみのわるいかえるが、おひめさまのきれいなお床とこのなかで、ねむりたいなんていうのも、おひめさまがかなしくなるのもむりはありません。

するとまた王さまが、

「泣くことがあるか。たれでも、こまっているとき、たすけてくれたものに、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ。」といいました。

おひめさまは、さもきみわるそうに、指のさきでそつとかえるをつまみあげて、上のおへやまでもつて行くと、そつと隅すみつこにおきました。そうして、じぶんだけが、お床にはいつてしまいました。

ところが、かえるは、さつそく、のこのこはいだしてきて、
「ああくたびれた、くたびれた。はやくゆつくりねむりたい。さあ、そこへ上げてください。でないと、おとうさまにいいつけるから。」といいました。

これでおひめさまは、すっかり腹が立ちました。そこでいきなりかえるをつかみ上げて、ありったけのちからで、したたか、壁^{かべ}にたたきつけました。

「さあ、これでたんとらくにねむるがいい。ほんとにいやなかえるつたらないよ。」

ところで、どうでしょう。かえるは、ゆかの上にころげたとたん、もうかえるではなくなって、世にもうつくしいやさしい目をした王子にかわっていました。

さて、この王子が、おひめさまのおとうさまのおぼしめしで、おひめさまのお友だちでも、おむこさまであることになりました。そのとき、王子はあらためて、じぶんの身の上の話をして、あるわるい魔法^{まほう}つかいの女のためにのろわれて、みにくいかえるの姿にかえられたが、それを泉のなかからたすけだして、もとのにんげんにかえしてくれるものは、この王さまのおひめさまのほかになかったといいました。それで、あしたはもうさつそく、ふたりつれだって、じぶんの国にかえって行くつもりだともいいました。

三

それでふたりはゆつくりやすみました。そして、あくる朝、お日さまがにこにこ、ふた

りをお起しになるじぶん、八頭^{とう}だての白馬をつけた馬車が、はいって来ました。どの馬も、あたまに白いだちようのはねをかぶつて、金のくさりをひきずっていました。馬車のうしろには、わかい王さまのごけらいが、しゃんと立っていました。これが忠義もののハインリヒでありました。

忠義もののハインリヒは、鉄のたがを三本も胸にまきつけていました。それは、ご主^{しゅく}君^{くん}がかえるにされてしまったので、かなしくてかなしくて、いまにも胸がはれつしそうになったので、やつとたがをはめて、おさえていたのです。たいせつな王さまが、もとの姿にかえたので、きようさつそく、八頭^{とう}だての馬車が、おむかえにきたのです。忠義もののハインリヒは、おふたりを馬車のなかに入れてあげて、じぶんはまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことをおもって、ぞくぞくするほどうれしくてなりませんでした。

さて馬車がすこしはしりだしたとおもうころ、王さまのお耳のうしろで、ぱちり、ぱちり、なにかはじける音がしました。わかい王さまはそのとき、うしろをふりかえっていいました。

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、いいえ お殿さま^{との}、

あれは馬車では ござんせぬ。

せつしやのむねに はめたたが。

殿さま、げえろにならしやつて、

ぎやあぎやあ、泉でなかしやるで、

はりさけそうな このむねを、

むりにおさえた そのたがが。」

それでも、ぱちり、ぱちり、また二どもはじける音がしました。わかい王さまは、そのたんびに馬車がこわれるのではないかとおもいました。けれども、それはやはり、ご主君がにんげんにかえって、たのしい日をおくられることになったので、ふさがっていたハインリヒのむねが、ひらけたため、胸のたががはれつして、とびちる音でございました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※原題の「[DER FROSCHKO:NIG ODER DER EISERNE HEINRICH]」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「DER FROSCHKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH」としました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かえるの王さま

DER FROSKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 グリム兄弟 Bruder Grimm

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>